

ロゴマーク デザイン学部メディアデザインコース1期生 木村 尚史

作品介绍

【大学を守るアマビエさま】
このアマビエ像は第26回芸術の森地区文化祭(2021年11月6日~7日、札幌芸術の森センター)に出展するために「きほんのきのかい(当時の学部1年生5名と教員2名)」が制作しました。作品にはコロナ感染症から芸術の森地区のみなさんと大学を守って欲しいという願いを込めています。また、ダンボールをカッターでカットするという基本的な加工技術から、立体物を構成する骨組みの組み方、作品をきれいに仕上げる技術まで、制作を通して学びの多い作品となりました。
現在も大学の玄関で、みなさんの健康と1日でも早いコロナ終息を願っています。

作者

デザイン学部 教授 細谷 多聞
デザイン学部 准教授 小宮加容子
デザイン学部 2年生 安西 千夏
岩瀬萌々香
大寺 梨香
岡和田未有
山田小都生



編集後記

2015年、国連で採択された地球環境の変化に対応した持続可能な開発目標:SDGsが採択されました。そして日本では2018年に未来社会に向けた情報社会に続く5.0Societyが提唱されました。さかんにデジタルトランスフォーメーションをすすめていた、まさにそのときにCOVID-19のパンデミックは起こりました。人との距離の取り方、接し方が変化したことにより、奇しくもデジタル化は飛躍的に進歩したのです。大学での授業も全くの元通りになることはもはやないでしょう。

そこで今回のテーマを「パラダイムシフト」としました。パラダイムシフトとはその時代に当然と考えられていたものの見方や考え方がドラスティックに変化することを指します。変化を余儀なくされたwithコロナの時代は、これまでの定説を見つめ直し、革新的なアイデアをもって変化する時です。制約の中で新たな考え方、アイデアで心に活力を取り戻し、希望をもって豊かな生活ができるように今回のテーマとしました。著者の皆さんのメッセージがみなさんのヒントやエールになることを願っています。

編集委員一同

札幌市立大学附属図書館ニュースレター
のほほん第15号

編集 札幌市立大学図書館運営会議
編集委員 神島 滋子 松井 美穂
松永 康佑 矢野祐美子

発行日 2022年1月20日

発行 札幌市立大学附属図書館
〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目
事務局 地域連携課 図書館担当
TEL.011-592-2346

制作・印刷 三浦印刷株式会社

ご感想をお聞かせください。
library@scu.ac.jp



【大学を守るアマビエさま】

特集 「パラダイムシフト」

コロナウイルスと「どこでもドア」
デザイン学部 教授 西川 忠

私のパラダイムシフト体験
看護学部 教授 樋之津淳子

デザインという言葉の怪しさ、
意味のパラダイムシフト
デザイン学部 教授 横溝 賢

変わることの中で、変わらないこと
看護学部 助教 栗原 知己

パラダイムシフトについて
デザイン学部 准教授 金子 晋也

「ニューノーマル」に思うこと
看護学部 助教 渋谷 友紀

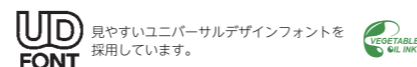
“引っ張らさる”リーダーのススメ
デザイン学部 准教授(共通教育) 並木翔太郎

最良の選択とは何か
看護学部 助教 市戸 優人

学生の本にまつわる話
黒船と明治、そして、コロナ 急性期修士論文コース 篠原 文英
あなたの実力はどこから? 看護学部2年 小番 穂
ビビッドカラーに惹かれて デザイン学部2年 水井さくら
音から自分を捉える デザイン研究科1年 清水 康志

カウンターの内側からの紹介図書
芸術の森キャンパス・ライブラリー司書 岡井ヨリザ
桑園キャンパス・ライブラリー司書 戸間替美紅

附属図書館 貸出・視聴ランキング



コロナウイルスと「どこでもドア」

デザイン学部 教授
西川 忠

筆者紹介

1961年生まれ。空知管内浦臼町出身。根っからの道産子です。1983年に道立寒地住宅都市研究所(現:北方建築総合研究所)に勤めた後、民間コンサルを経てSCUへ。還暦の新米教員です。専門は建築の構造・材料。特に既存建築物の診断や補修・補強。「知」も体力が基本」の信条で、毎週テニススクールに通っています。2021年3月に孫が生まれて、おじいちゃんになりました。

イラスト
デザイン学部1年
林 港人



■名刺が減らない

iPhoneの登場で通話手段が携帯からスマホに変わったのは凄く早かったけれども、それでも数年かかりました。一方、2020年から2021年にかけて、約1年で出張や会議の姿があっという間に変わりました。コロナウイルスの蔓延で否応なくという理由ですが、それにしても短期間での大激変です。人と会うための「移動」という行為が、生活の中からなくなってしまった訳ですから。併せて「時間」の感覚も変わりました。

私も長い会社員をやっていましたが、それまでは、顧客先を訪問して、まずは「西川です。いつもお世話になってま〜す。」「ご無沙汰しています。変わりありませんか〜。」、初対面であれば名刺を交換して「西川と申します。よろしくお願いたします」なんていう挨拶からコミュニケーションが始まりました。それが今では、画面をクリックして「〇〇さん聞こえてますか〜」が当たり前になってしまいましたから。最近では名刺も全然減りません。相手からももらえないので、リモート会議で会った人に連絡したい時に困ることがあります。リモート会議で初対面の人に自動的に送られる“電子名刺”なんていうのががあるとありがたいかも。

とはいえ、コロナ以前だってテレビ会議のシステムはあった訳で、やろうと思えばできたのに、そうならなかったのは、やっぱり人と人のコミュニケーションってというのは、面と向かって表情や息遣いを感じながらじゃなきゃダメだと思うところが多分あったんでしょう。それもとても大切だと思っています。

■Zoomは未完成の「どこでもドア」

外部の会議や研究委員会、学会、セミナーなどのほとんどでZoomが当たり前になったせいで、「距離」がなくなりました。日々の生活の中で、人と会うための「移動」は結構な時間を占めていましたが、それがなくなるというのは未完成の「どこでもドア」ですね。ドアの向こう側までは行けないけれど、ドアの向こうに相手が居て、ドア越しにコミュニケーションをとることができる訳ですから。

10年後の西暦2032年、それまでと仕事の仕組みがガラッと変わって、過去を振り返った時、きっと「2021年のコロナが転機だった」と思うんでしょう、きっと。

■本物の「どこでもドア」はできないものか…

確かにリモート・コミュニケーションはこの上なく便利です。それでも、長年、対面型サラリーマンとして生きてきた者としては、物足りなさや歯がゆさを感じる人が多いです。人と会うときの臨場感というか、肌感覚というか。それに、出張先で旨いものも食べたいですし…。

そこで、本当に「どこでもドア」ができないものか、早速SCU図書館で調べてみました。要は物質の瞬間移動が可能かということです。

人間のような大きな(分子レベルの)物質の瞬間移動は不可能です。しかし、電子やクォークレベルの素粒子では、瞬間移動ではないけれども、同じ物質が同時に違う場所に存在し得ることが知られています。同じ物質が2つあるのではなく、1つの物質が“異なる場所に共存”するということで、「状態の共存」といいます。実験では100km以上離れた場所での共存が確認されているそうです。

ということは、直接行って見たり聞いたりすることはできないけれども、向こう側に五感センサーがあって、その情報を素粒子の特性として与え、こちら側の人間の脳神経の中で情報を伝達する素粒子と共存できれば、向こう側に行っているのと変わらない状態を知覚できる…、ということと解釈しました。

これは「量子論」の世界の話ですが、今や画期的な能力を持つ量子コンピューターが登場したように、量子論の分野は目覚ましく進歩しています。完成品の「どこでもドア」で向こう側まで行ける日もそう遠くないのかもかもしれません。

参考文献

「量子論のすべて:量子論の基本から量子コンピューターまで(ニュートン別冊)」ニュートンプレス、2019
芸術の森 2F 一般図書 421.3/Ryo
竹内薫「まんがでわかる量子論」PHP研究所、2017
芸術の森 2F 一般図書 421.3/Tak

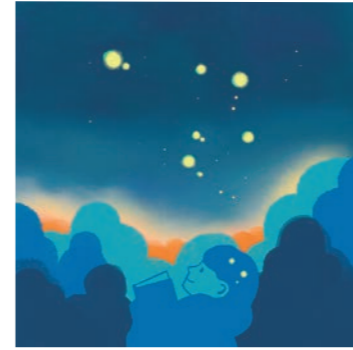
私のパラダイムシフト体験

看護学部 教授
樋之津 淳子

筆者紹介

道東出身、高校卒業後は東京以外の関東圏で大学生、看護師、教員として過ごした。2006年、本学の開学と同時に購読してUTターンする。専門は基礎看護学、看護技術学。ねこ族。連れ合いのルーツが西日本(岡山、山口)のため、日々異文化との闘いを飽きもせず繰り返す毎日。

イラスト
デザイン学部3年
渡邊 麻央



半世紀以上、人生を歩んできると、最近の記憶はあっという間にかけ消されていくのですが、学生時代のことは強烈に記憶に刻み込まれています。その中で非常にインパクトの強い体験についてお話ししたいと思います。

私にとってパラダイムシフトといっても過言ではないと感じた強烈な体験は、看護学生だった時のことです。今も看護学生は過密なカリキュラムですが、私が学生だった1980年代は土曜まで授業があったのにもかかわらず、毎日追われるような超過密な時間割の海の中で真正正銘の「かなづち」であった私は、完全におぼれかけていました。皆さんも時に将来のことで悩むことがあるかもしれませんが、私自身も大学入学時から自分は本当にこの道を選んでよかったのかなと、何度も考えたものです。そんな風にもやもやしていた頃、いつものように教室のいちばん後ろでぼんやりと受けていたある授業で私はものすごく強烈なインパクトを受けたことを今でも鮮明に覚えています。これは「看護過程」とは何か、問題解決志向(problem oriented system: POS)とは何かという授業だったと思いますが、この授業を聞いて、これまで半ば、疑問に思いつながら受けていた授業科目がいきなりつながり始めたのです。まるで停電していた街の電気が一斉に点くように、ばらばらとしていた脳内のシナプスが一斉につながり始めた、そんな衝撃を受けました。それからは急に授業が意味のあるものとして息しはじめ、私が知りたかったのはこれなんだ、という「腑に落ちた」記憶がありありと残っています。これをパラダイムシフトと表現してよいかどうかはわかりませんが、私の中で何かが大きく変わり、看護って面白そう、やっていけるかもと確信した瞬間があったのは間違いありません。

それから、時を経て自分が教える立場となり、そんなインパクトを与えられる授業ができる教員になれたのだろうか、という自問自答をいつも繰り返しています。

実は私が最初に看護教育を受けた大学は今から思うとかなり実験的な教育方法がなされていました。入学後から2年生まで毎週1冊、何らかの本を読んで要約を提出するというタスクがあったり、小グループでV・ヘンダーソンの原書「Basic Principles of

Nursing Care」をみんなで分担して翻訳し、先生達とディスカッションする演習ゼミもありました。世の中に翻訳版「看護の基本となるもの」が出ていることを後で知って、みんなでものごとくがっかりしたことも笑い話です。教科書はほとんど指定されず、専門科目の授業はグループワークを行い、資料を作ってプレゼンし、ディスカッションする形式の授業でした。自分たちが図書館で参考にしてきた看護の本は大学によっては教科書として学生が購入しているものであったことを知ったのもだいぶ後でした。図書館には常に仲間がいて、閉館時間までグループワークをするなど、放課後も立ち寄ってから帰宅することが多かったです。もちろん、部活もアルバイトも忙しい日々の合間をぬって人並みに行っていましたから、あっという間に学生生活は過ぎ去ってしまったという思いがありました。というわけで、もう少し学生生活を続けたかった私は、さらに別の大学に編入学し、そのまま大学院にも進学しましたが、残念ながらこれほどインパクトのある体験にはその後、出会えませんでした。

みなさんの学生時代もあっという間です。やりたいことはとことんやってみる、猪突猛進が許されるのも学生の特権だと思います。ぜひ、多くの体験を通して自分の価値観が大きくシフトするような節目に遭遇する機会がありますように!

参考文献

日野原重明「POSの基礎と実践 看護記録の刷新をめざして」医学書院、1980
桑園書庫 492.912/Hin
Virginia Henderson「Basic Principles of Nursing Care」ICN,11th printing, 1979(初版1960)
ヴァージニア・ヘンダーソン著、湯楨ます・小玉香津子訳「看護の基本となるもの:再新装版」日本看護協会出版会、2016
桑園一般図書 492.901/Hen

デザインという言葉の怪しさ、意味のパラダイムシフト

デザイン学部 准教授

横溝 賢

筆者紹介

ウェールズ大学ドムスアカデミー造形研究科アート&デザイン修士コース修了。博士(工学)。
地域の人びとの営みに加わり、話を聞いて、学ぶことから自分ができるデザイン活動をその場で形作る社会実践デザインを研究しています。これまで東京-ミラノ-ハル-札幌と未知をもとめて拠点を移し、各地に出向きながら人びとの共生の知恵を学ぶデザイン活動を続けています。

イラスト
デザイン学部2年
松本 七夕花



■「いいデザインだね」に気をつけよう

お薦めのモノを紹介する時。私たちは、何かつけて「デザインがいい」という。そう言い切ることで、「ああ、そうなのか。これはいいモノなのか」と相手に思わせようとしてはいただろうか。「いいデザインだね」という時は、たとえ相手が、そのモノに直接触れたことがないとしても、「デザイン」という言葉のもつ曖昧さを意図的に利用している節がある。そのように考えてみると、「デザイン」という言葉は便利であるが、フワッとしていて怪しい言葉でもある。

これまでデザインは産業と二人三脚で、安心安全な暮らしや社会づくりを目標にモノづくりに取り組んできた。暮らしは産業とデザインによって便利になったが、社会や環境は産業とデザインによって分断され、破壊され、不可逆的な問題を抱えることにもなった。そんな矛盾を抱えたことが原因なのか、デザインは今、パラダイムシフトを迎えようとしている。それが「デザインすることを人びとの手に戻し、自分たちの問題は〈自分たち〉で解決しようとする」コ・デザインという考え方である。

上平崇仁による「コ・デザイン～デザインすることをみんなの手に～」は、人間がもつ根源的な共同性の中にあるデザインの知性と実践のアプローチについて解説した書である。上平は、読者がコ・デザインという言葉の雰囲気や感に惑わされないように、人間とデザインの本来の関わりから丁寧に解説している。ここでは、本書の2章「デザインすることの両義性」の内容を引用し、デザインという言葉の本来の意味について考察する。

■著者の説明(2章 デザインにできることできないこと_P71_4L/P81_1L)

哲学者のフルッサーは「デザイナーとは詐術に長けたものであり、罠を仕掛ける策略家でもある」と警告を鳴らしたが、これはどうやら近年に限った話ではないようだ。1704年に発行されたオックスフォード英語辞典には、すでにデザインとは狡猾な工夫、「ある企てを犠牲にして作られた別の企て」の語義が掲載され、デザイナーという言葉にも「陰謀者、策士、密通者」と別の意味が掲載されていたようだ(p71_4L)。

デザイン批評家のA・フォーティは、デザインはデザイナーの創造性だけで成り立っているのではなく、社会の中に生まれた欲望の観念(イデオロギー)との相互作用のなかで商品へと変換され

ていく構造があることを指摘している(p81_1L)。

■横溝の理解

300年前から、デザインは企て方を間違えると社会に悪影響を及ぼすことが指摘されていた。その企ての1つに自分で衣食住をしつらえるのではなく、市場経済によって生活を成り立たせることを社会善とする「観念」が作動的に形づくられた。私たちデザイナーは生活文化向上のため、機能と美しさ、そして生産性を兼ね備えたものを考案するという生業に社会的な意義を見出してきた。観念という訳語の語源となるイデアとは現実世界の根拠、判断や行動の礎となる概念のことを指す。そうすると、フォーティの言う〈欲望の観念〉とは、市場という顔のない不特定多数の欲望を(私たち)の生き方の根拠とする「概念」となる。その一方で、身近な家族や仲間との共同を支える観念は、お互いに「善くあろうとする」共通善のイデアである。産業化社会ベースのデザイナーはフォーティのいう通り、社会に潜在する〈欲望の観念〉を具現化することに取り組んでいる。一方、人びととの自立共生を志すデザイナーは、欲望の観念という「企て」を客体化しながら、社会集団の中にあるいは社会活動の中に潜在する「お互いに善くあろうとする判断や行動の礎となる共生の観念」を具現化することに取り組んでいる。

つまり、コ・デザイナーは、多様な社会集団との関わり合いの中で「互いに善くあろうとする」観念(判断や根拠)を醸成し、その経験から学んだことを絵や言葉を用いて見える化することを試みている。そうすることによって、社会集団がその場所に根ざして生きることを意味を学び合うコ・デザインが自然的に立ち上がっていく。その企てが見える形になった時、人びとは「面白かったね」「またやってみよう」と互いの経験を労うだろう。このお互いを慮る相互的なコミュニケーションこそ「デザイン」なのだ。現場の人びとが認めるようになった時、「デザイン」という言葉の怪しさは払拭されるだろう。

参考文献

上平崇仁「コ・デザイン:デザインすることをみんなの手に」NTT出版, 2020
芸術の森 2F 一般図書 757/Kam

変わることの中で、変わらないこと

看護学部 助教

栗原 知己

筆者紹介

群馬県出身。11年の臨床経験を経て2021年4月から本学の教員となった。臨床では高度救命救急センターに勤務し、救急・集中治療の看護に携わっていた。教員の生活にも、北海道の生活にもまだまだ不慣れであるが、少しずつ慣れていきたいと、日々北海道での生活を模索している。

イラスト
デザイン学部2年
河内 菜佑



今回、私は「パラダイムシフト」というテーマでの原稿依頼をいただいた。もし私が様々な図書を知っていれば、パラダイムシフトについて語られている図書をここで皆さんに紹介できるのだが、残念ながら私自身はそのような本を読んだことがなく、図書の紹介が難しい。しかし、原稿の依頼をいただき、パラダイムシフトという言葉を知った時に思いついた1冊の本があるので、今日はその本を紹介しようと思う。

そもそも、パラダイムシフトってどんなことを意味するのか、を考えてみる。パラダイムシフトという言葉は、これまでの定説を見直して、今後に新たなことをもって変化していく時、という意味を示しているようだ。COVID-19の影響を受けながら生活し、その中で新たな生活様式を模索している、まさに今の世の中を表すピッタリの言葉だ。このような世の中では次々に新しいものが生まれ、日々生活が変わっていくので、私達もその社会に順応する必要があるだろう。もちろん、それは必要なことであるし、大切なことだと思う。しかし、大切なことは本当にそれだけなのだろうか。

これは完全に私見なのだが、本当に大切なこととは、そのような移り変わりの激しい中でも変わらないのではないかと考えている。何故そう思うのか、といわれると、あくまでも感覚なのだが、それでは皆さんに伝わらないので少し言葉にしてみる。例えば、誰か速くにお住まいの人と会う時、COVID-19以前ではその場に出向いたり、どこかで待ち合わせをして会っていた。そのために移動時間や交通費を負担し、遠ければ遠いほど大きな負担を負いながら会っていたので、会えた時の有り難みがとても大きかった。しかし、今ではインターネットを利用したサービスを使って、パソコンや、モバイル端末を使ってカメラと画面越しにどこでもすぐに、移動時間や交通費などの負担なく、相手との距離も関係なく会うことができるわけだ。そうすると、遠くにいるにも気軽に会えるので、会えることへの有り難みが薄れるような気がしている。これを便利になったといったらその通りだと思うし、パラダイムシフトとしても、新たな人と会う手法として非常に有用なのだろう。そんな中で、人と会うことへの感謝の気持ちを持つこ

とや、相手への配慮や礼節などは変わらないものだと思うし、人とコミュニケーションを取る中で、これらのことはとても大切なのではないかと考えている。

ここで皆さんにお伝えする本を紹介させていただく。学生の皆さんにはちょっと興味湧きにくい本かもしれないが、「教育の過程」という本である。時代が変わりゆく中で、教育も様々な場所で様々な手法とともに変化しているのだが、大学院で教育を学んでいた私もその教育の歴史の世界に浸っていた。その中で、このような移り変わる教育の場において、常に変わらず必要なことは何か?と考えるとその答えはなかなか難しいものであった。そこで、この「教育の過程」が出てくるのだが、なんとこの本は1963年に発行されており、約60年は読み続けられていることになるのだ。この本は約200ページに渡って、教育とは何か、について書いているのだが、私がこの本の中で特に印象的だと思っているのは、「教育をするためには、その対象の構造を理解しないといけない。」ということだ。当時学生だった自分は、この内容に対して非常に感銘を受けた。きっとこの「教育の過程」は発行されて以来、様々な時代を経ながらこのことを伝え続けているのだろう。そう思うと、これは様々な教育現場におけるパラダイムシフトの中で、“変わらないもの”なのだと思う。

パラダイムシフトというテーマの中で、本当に大切なことは、移りゆく時代の中でも変わらないのではないかと、ということをお伝えさせていただいた。この記事を読まれている皆さんも、日々変化する物事や社会を楽しみつつ、その中でずっと変わらずに本当に大切にすべきことは何か、を考えてみる時間も楽しんでみてはいかがだろうか。

参考文献

J.S.ブルーナー著、鈴木祥蔵、佐藤三郎訳「教育の過程」岩波書店, 1963
桑園シラバス図書 371/Bru

パラダイムシフトについて

デザイン学部 准教授

金子 晋也

筆者紹介

熊本県の天草という島で育ちました。大学は沖縄、その後は横浜、神戸と観光地としてもよく知られている街で暮らしました。札幌に来てもうすぐ10年です。

パラダイムシフトというテーマを頂いたとき、私はまずスマホを手に取り、「パラダイムシフト」を検索しました。そうすると、5.84インチのスマホのディスプレイには約325万件の上位10件が表示され、その中のウェブサイトにはパラダイムシフトがトーマス・クーンが提唱した科学思想に関する用語である云々と書かれていました。

そこで、大学図書館のサイトで「トーマス・クーン」を検索しました。そうすると、2件の蔵書が確認できました。

さっそく、研究室から150mほど離れた芸術の森キャンパス図書館に足を運び、文庫本コーナーから「コペルニクス革命」(トーマス・クーン)を見つけました。ついでに、同じ本棚にあった新書と文庫本の2冊を手に取り、一緒に借りていきました。

研究室に戻り、「コペルニクス革命」に目を通しました。冒頭には、この本は学生に向けたもので「おもにパラダイムとして機能する。(中略) 技術的な科学上の資料は本質的だが、それらが機能しはじめるのは、歴史的あるいは哲学的枠組における位置が決まってからである」(P.6)と述べられています。

「パラダイムとして機能する」というのはしびれる言葉だと思いつつ、私はちょっと頭が重くなってきたので、タブレットの辞書アプリで「パラダイム」を調べてみました。タブレットには、「のちに一般化され、ある一時代の人々のものの見方・考え方を根本的に規定している概念的枠組み」(大辞林)と表示されます。

「根本的に規定している概念的枠組み」という意味が分かりにくいので、私は生活のなかで考えてみることにしました。今晚の食事を例に考えます。まず、食べたいもの(生理的)を想像します。次に、買い物では、お財布の中身(経済的)、カロリーや塩分量などの健康面(科学的)から献立を判定します。帰宅後に、購入した食材を調理します。その他にも、テーブルセットや盛り付け(美学的)や、食事マナー(道徳的)なども考えます。このように、私は今晚の食事にたどり着くまでに、いろいろな「ものの見方・考え方」で考えました。

ところが、この時点で、私はいろいろ考えるのが面倒になり、この様なパラバラなものの見方をまとめる根拠が欲しくなってきました。むかしは、食事は宗教や信仰、父親の好みによってある程度ですが限定されていたことを想像します。そして、現代にお

いて宗教や信仰は何に置き換えられたのか思いを巡らせました。

ふと、図書館で借りた新書の「集合知とは何か」(西垣通)が目にとまりました。まえがきは、「『知とは何か』という問いかけは、決して、暇つぶしのペダンティックな質問などではない。むしろ、命がけの生の実践にかかわる問いかけなのだ」という問いかけから始まります。

ここで、私は姿勢を正されたような感覚を受けました。同時に、いま多く用いられている「パラダイムシフト」とは何が考え直してみる必要があると思いました。

私は再び、借りてきた本を手に取りました。「コペルニクス革命」では、コペルニクスが地動説を天文学における革新に限定し、その影響の範囲をわずかにしか理解していなかったと述べられています。ここから、パラダイムシフトはラディカルな革命ではなく、知の体系からみると限定的な革新が、後世からみると変曲点に見える時点を意味することが読み取れます。

結局、「パラダイムシフト」とは何だったのでしょうか。この問いを繰り返すうちに、私は現代のパラダイムがスマホやタブレットの情報に依拠していることを体験的に理解しました。つまり、ドラスティックな変化は掌の中で起こっているようです。

一方で、借りてきた新書から、専門知よりも集合知が優位に立っていることも知ることができました。今度は、図書館に行って集合知について調べてみたいと思います。

その前に、お昼ご飯を食べたいと考えています。秋晴れの下、もう一冊借りていた『日本数寄』(松岡正剛)を持って。

参考文献

トーマス・クーン著、常石敬一訳「コペルニクス革命：科学思想史序説」講談社、1989

芸術の森 1F 文庫新書 080/Kod/881

西垣通「集合知とは何か：ネット時代の「知」のゆくえ」中央公論新社、2013

芸術の森 1F 文庫新書 080/Chu/2203

松岡正剛「日本数寄」筑摩書房、2007

芸術の森 1F 文庫新書 080/Chi/マ-25-2



イラスト
デザイン学部2年
刀根 りな

「ニューノーマル」に思うこと

看護学部 助教

渋谷 友紀

筆者紹介

東京で大学病院に勤務後、札幌市内で産業保健師として従事。その後、看護専門学校における専任教員を経て2017年より本学の教員となる。「看護は様々な学問領域の知見を取り込みながら発展していくもの」という恩師の言葉を信じて、現在札幌市立大学デザイン研究科に在学中。



イラスト
デザイン学部2年
刀根 りな

パラダイムシフトというテーマですが、新型コロナウイルス感染症によって、私たちの生活や働き方、大切なものの価値観、家族との関係性など多くのものが変化しました。私たちに選択肢は無く、制限を強いられる生活は本当にストレスフルで、効果的なコーピング方法を模索している実感があります。そのような中、「断捨離」が再びブームになっていると聞きました。外出自粛や在宅勤務で家にいる時間が長くなり、少しでも快適に過ごそうと部屋を片付ける人たちが増えているそうですが、私我家の中の整理をしました。そして、20年…30年ぶり(?)に見つけた本を紹介します。

「23分間の奇跡」という本で、ジェームズ・クラベルという方が執筆し、青島幸男氏が翻訳されています。ちなみに、私の世代で青島幸男氏と言えば、作家や東京都知事ではなく意地悪ばあさんです。

この小説には、7才の子ども達が小学校で23分間の間に経験することが、子どもの目線で書かれています。

朝の教室。担任の先生がガタガタ震えているので、子ども達も緊張しながら何かを待っていると、若い先生がやってきて、子どもと一緒に歌をうたい、ゲームをします。始めは新しい先生のことを信用しない子どももいますが、先生と話すうちに子ども達の気持ちが変化していきます。例えば、新しい先生は神様に祈ることは意味がないということを子ども達に伝えます。クリスマスにプレゼントが欲しいと神様に祈っても、プレゼントをくれるのは神様ではなく、お父さんやお母さんと教えてくれます。子ども達もそれが嘘ではないことを知っているの、新しい先生は嘘をつかないと思いはじめます。教室の入り口に掲げてある国旗について、先生がこれは何?と聞くと、子ども達は大切なものだから飾っていると、先生に教えます。先生は、大切なものならみんなが少しずつ持っていることを提案します。国旗が切り分けられると子ども達はわっと歓声をあげ喜びます。このような先生と子ども達のやり取りが続き、子ども達全員が先生のことを好きになるまでに23分かかったという話です。

初版は、A5判の一回り小さなサイズで80ページ程度の本です。1ページには1行だけ、2行だけ、というようにポロポロと文章が書かれており、あっという間に読めてしまいます。

初めてこの本を読んだとき、私は学生で、原文のタイトルが「The Children's Story」なのに、意地悪ばあさんはこんなタイトルにするのか!と驚いたのを覚えています。

この本には、子ども達と先生とのやり取りが描かれているのですが、教職に当たるものの責任の重さ、戦勝国が敗戦国に新しい思想を持ち込む、いわゆる洗脳の簡単さ、あっけなさ、今まで正しいと信じてきたもの、当たり前だと思ってきたものが突然変わる世界が描かれており、その様は、近年私たちがコロナ禍で経験したことと通じるものがあるように感じます。大袈裟かもしれませんが、私の価値観は今回のパンデミックを経験したことで、あっけなく変化しました。気がつけばニューノーマルな生活に慣れていくという表現が正しいかもしれません。オンラインによるコミュニケーションが日常的になり、物理的な活動は狭くなりましたが、オンラインを介した活動範囲は大きく広がりました。世の中では、ワクチン開発などをめぐり各国のリーダーシップと世界のパートナーシップの在り方が注目され、SDGs(持続可能な開発目標)の浸透も加速したように思います。世界が協力し合い未来のために乗り越えなければならない課題を、自分ごととして捉えるようになった人たちが私の周囲にも増えています。この状況下、うっかりすると私はこのままぼんやりと過ごしてしまいそうなので、自分がパラダイムシフトの渦中であることを自覚しながら、この転換が良い方向に向かうように考え、行動しなければならないなあ、と慌てています。

参考文献

ジェームズ・クラベル著、青島幸男訳「23分間の奇跡」集英社文庫、1983

“引っ張らさる”リーダーのススめ

デザイン学部 准教授(共通教育)

並木 翔太郎

筆者紹介

札幌出身。2021年4月に札幌市立大学に着任。専門は言語学(特に日英語の比較対照研究と北海道方言の自発態「ラサル」に関する研究)。博士(言語学)。

イラスト
デザイン学部2年
中下 柚志



このタイトルは、北海道方言母語話者ではない方にとって、少し解説が必要かもしれません。北海道方言(および一部の東北方言)には、「自分の意志とは関係なく、つい〇〇をしてしまう」という自発の意味を表す「ラサル」という助動詞があります。最近では、北海道のお米のローカルCMでもラサル表現が使われているのを目にします。「リーダー」と聞くと、グイグイ引っ張っていかれる「支配型リーダーシップ」を思い浮かべがちですが、これからの時代は、気がつけば皆がフォローしてくれている(=引っ張らさる)状態、「サーバントリーダーシップ」が求められるのかもしれない。

サーバントリーダーシップとは、アメリカのロバート・K・グリーンリーフが提唱した「リーダーである人は、まず相手に奉仕し、その後相手を導くものである」というリーダーシップ哲学です。周囲に指示を出して目標達成に向かおうとする従来の支配型リーダーシップとは異なり、サーバントリーダーは、奉仕や支援を通じて、周囲からの信頼を得ることで、周囲が主体的に協力してくれるような状況を作り出します。サーバントリーダーシップの属性として、次の10項目が挙げられます。

- ①傾聴(Listening)：相手の望むことや、自分が本当に望むことに耳を傾け、自分の存在意義をその両面から考えることができる。
- ②共感(Empathy)：他者の気持ちを理解し、共感することができる。
- ③癒やし(Healing)：集団や組織に欠けているものや傷ついている箇所を見つけ、全体性(wholeness)を探求することができる。
- ④気づき(Awareness)：自分や自分の組織への気づきを得ることができる。
- ⑤説得(Persuasion)：権限に依拠することなく、強要することなく、他者を説得できる。
- ⑥概念化(Conceptualization)：常に目標への志向を忘れずに、他者のゴールをイメージしながら、自分の役割を最適化することができる。
- ⑦先見力、予見力(Foresight)：過去や現在の現実から、もたらされる帰結を見定め、より良い将来のために決定することができる。
- ⑧執事役(Stewardship)：他者から大切なものを任せると良いと信頼されるくらい、信頼関係を構築することができる。
- ⑨人々の成長に関わる(Commitment to the Growth of people)：他者には業務上の成果を超えて、さまざまな能力や可能性、価値があると信じて、その人の成長にコミットすることができる。
- ⑩コミュニティづくり(Building community)：ただ人が集まっているだけの

集団ではなく、他者に成長を促すような組織を作ることができる。

この10項目には、従来のような他者を引っ張ろうとする意志は感じられず、むしろ、他者の自主性が活性化するようにサポートする姿勢として理解することができます。

コロナ禍で、私たちのコミュニティの有り様は変化を余儀なくされました。ソーシャルディスタンスが推奨され、自分と向き合う時間を持ったことで、自身の価値観に気づき、その価値観に基づき行動することが、コミュニティをより多様なものにしつつあります。また、コミュニケーションの形態についても、オンラインがより身近な選択肢になり、地理的・時間的な障壁を以前よりも感じなくなってきました。その一方で、対面形態では容易にキャッチできていた(と錯覚していたのかも知れない)相手からのさまざまなシグナルが、オンラインでは受信することが難しくなりました。しかし、このような状況下でも、大小問わずコミュニティを形成し、集団や組織としてひとつの方向へ進んでいかなければなりません。多様な価値観が認められ、他者の本当の気持ちがこれまで以上に把握しづらい環境下において、メンバーが組織に愛着を持ち、1つの目標に向かうためには、他者の内なる声に耳を傾け、他者を理解し、その結果として自己についても理解し、他者との信頼関係を構築する必要があると強く感じています。

これまで以上に先行きが不透明な現代社会において、私たちは、これからを考え、これまでを見直し、変革を積極的に起こす段階に来ているのかもしれない。変革には、革新的なアイデアが必要です。アイデアは、ひとりで生み出すには限界があり、主体性を持った多くの参加者が必要です。そのような参加者を生み出すのがサーバントリーダーシップであるなら、これからの時代は、引っ張っているつもりなんてないのに、皆が気づいたらフォローしてくれる、「引っ張らさるリーダー」にぜひ注目してみてください。そんなリーダーが、北海道から、そして、札幌市立大学から、たくさん輩出されることを願っています。

参考文献

- ロバート・K・グリーンリーフ著、金井真弓訳「サーバントリーダーシップ」英治出版、2008
桑園 シラバス図書 361.43/Gre

最良の選択とは何か

看護学部 助教

市戸 優人

筆者紹介

高校生の頃に地域で働く保健師の魅力にひかれ、北海道立保健所に保健師として勤務する。保健師という職の魅力を伝えたいと教育研究の場に足を踏み入れ、2021年度より札幌市立大学に勤務となる。思春期保健活動の一環である性教育に行動科学を取り入れた研究に取り組んでいる。

イラスト
デザイン学部2年
中下 柚志



みなさんは、今なぜこのエッセイを読んでいるだろうか。「面白そうなテーマだったから」、「“のほほん”の愛読者だから」、「友達に勧められたから」など、このエッセイを読もうとページを開いた理由は様々だと思う。私は、この“エッセイを読む”といった行動を一つとっても、人の行動は不思議なものであると感じる。人は、目的を持って行動を起こすこともあれば、ちょっとしたきっかけや促しで行動することもある。時には、無意識に行動していることもあるだろう。

みなさんは、自分が何か行動を起こす時、どのようなことを考えて行動を選択しているか、考えたことはあるだろうか。改めて日々の生活を振り返ってみると、無意識のうちに行動していることが多くある。そのような、人が無意識に行動を選択する際の認知のクセに着目をして行動変容を促す手法が、今回紹介する書籍の中で述べられている“ナッジ”である。

皆さんは、ナッジを耳にしたことはあるだろうか。私は、この書籍を手にとって読んだ時、ちょっとした仕掛けで人の行動を変えることができることに強い衝撃を受けた。ナッジとは、人は熟慮を重ねて行動を選択しているようにみえて、実は認知のクセが行動の選択に影響を与えている点を突いた考え方をもとにした行動科学の手法である。

例えば、新型コロナウィルスの影響でトイレトペーパー不足が起こるとい噂が流れた時、「情報は不確かなものである」と確信しながらも、ドラッグストアに買いに走った人はいないだろうか。また、コロナ禍で不要不急の外出自粛が求められている中、メディアで流れる街中の人出を見て行動を選択していた人は、少なくないのではないだろうか。これらは、他者の行動や情報に影響を受けやすい人の認知のクセによって引き起こされた行動の一例である。さらに身近なところでは、コンビニやスーパーのレジ近くの床に張ってある足跡のマークの上に律儀に立ってしまったり、レジ前で山積みになっている新商品を見ついでつい買い物がごと商品を入れてしまったりと、日々の生活を振り返ると不本意ながらも気付かぬうちに自然と行動していることが数多くある。

ちなみに筆者は、スマートウォッチを身につけているのだが、座ってばかりいる日には、「まだ時間がありますよ」とアクティビ

ティを促され、たくさん歩いている日には、「その調子でいきましょう」と褒められる。これも一種のナッジであり、スマートウォッチに上手く誘導されていることに気が付きながらも、「褒められたい」と日々歩数を増やすために励んでいたりする。このように、生活の中には、行動を促す様々な仕掛けが溢れており、不合理ながらも無意識に行動を選択していることが多く存在するのである。

COVID-19の流行に伴い、人々は外出を自粛し、自宅内での活動や感染対策に留意した形での行動が増えたと思う。身近なところでは、会議や授業、家族や友人との交流がオンライン上で行われるなど、様々な“もの”や“こと”が革新的に変化した。これらの変化は、私たちの生活に大きな影響を及ぼし、様々な行動の変化をもたらした。皆さんは、この目まぐるしく変化する時代において、自分でしっかりと考えて、最良の選択をした上で行動することができているだろうか。様々なものが変化したとしても、人が行動を選択する際の認知のクセは、そう簡単に変わらないものである。この機会に自分の行動を振り返りながら、自分の“認知のクセ”を見つけ出し、行動や生活を見つめ直す機会としてみてはいかがだろうか。

参考文献

- リチャード・セイラー、キャス・サンステーン著、遠藤真美訳「実践行動経済学：健康、富、幸福への聡明な選択」日経BP社、2009
芸術の森2F一般図書 331/Tha

黒船と明治、そして、コロナ

急性期修士 論文コース
篠原 文英



イラスト
デザイン学部1年
林 港人

この1年、COVID-19の世界的流行により、身の回りが劇的に変化した。たとえば、大学院に入学してから、対面授業は数えるほどしかなかった。殆どが、オンライン授業に移行した。確かに、当初は戸惑う部分もあった。ただ、仕事をしている身としては、通学の手間が省けて、大変助かった。また、病院の仕事をしている、変化に気づく。たとえば、手指衛生だ。COVID-19流行以前は、手指衛生の重要性を説くも、中々、アルコール製剤の消費量が増えなかった。だが、COVID-19流行以後、手指衛生が徹底された。一体、あの手指衛生を普及するための苦労は何だったのだろうか。そう思う程、手指衛生の実施率は改善した。

今回、感染症の流行により、私たちの身の回りは劇的に変化をせざるを得なかった。このような事態を体験して、私はある小説を思い出す。その作品は、明治という時代を舞台としている。そして、今の私たちと同様、劇的な変化を要求された時代だった。

1853年、江戸時代後期、黒船が神奈川に来航する。この当時、日本は武士の時代だった。彼らは刀を腰に差し、移動は徒歩、もしくは馬に乗っていた。海路は船が使用されていたが、木造船であり、動力は風だった。だが、浦賀に来航したアメリカの船は、全てが違った。まず、大きさが違う。江戸時代の日本人が思い浮かべる船より遥かに大きい。また、黒船は蒸気を発していた。つまり、石炭を燃料としていた蒸気船であった。江戸時代、日本は鎖国していたため、海外の情報は限られていた。そして、江戸時代の武士たちが、圧倒的な科学技術力の差を見せつけられた出来事、それが黒船来航であった。これを機に、国内は2つの勢力に分断され、1868年の明治維新に繋がっていく。

紹介する小説は明治維新後、四国の愛媛県から始まる。主人公は3人、日露戦争で軍人として活躍した、秋山兄弟と俳句・短歌の革新運動を進めた正岡子規である。物語の中で、重要な活躍をする3人だが、序盤はとかく苦労する。3人とも武士の家系であったが、明治維新で武士という階級がなくなってしまう。そのせいで、秋山兄弟の家には、とにかく金がなかった。

一方、明治政府、江戸幕府から政権の委譲には成功した。しかし、世界では、ヨーロッパ各国が植民地政策を、せっせと進めている最中である。東アジアの最先進国であった中国は、イギリス

と戦争し、あっけなく敗北してしまう。明治政府は中国がヨーロッパに破れた事実を目の当たりにしている、一刻も早く、ヨーロッパに追いつかなければいけないと危機感がある。そして、彼らは西欧に追いつくために、政治、教育、軍事等のシステムを丸ごと真似て、日本に移植した。この過程で、国内において、大学に相当する教育機関が作られる。

今でも、大学を卒業していなければできない仕事は存在する。もし、WHOなどの国際機関で働きたいなら、修士、博士等の上位の学位が要求される。現代でも、学歴によって、ある程度職業が左右されてしまうのは、周知の事実だ。そして、明治の時代は、これが顕著だった。政府はヨーロッパのシステムを導入しており、偉くなりたければ、ヨーロッパ流の教育を受けざるを得なかった。ただ、この事実も、それまでの武士などの階級に関係なく、学問をすれば、出世できるという見方も可能だ。そして、秋山兄弟が貧困の生活から脱出するためには、学問しか方法が無かった。彼らはあらゆるツテをたより、東京の学校を目指していく。

この1年、コロナで劇的に身の回りが変化した。ただ、我々が経験してきた以上の変化が、過去にも起きている。インターネットもTVも電話もない時代に、黒船来航からわずか、15年で武士は刀を捨て、髷を落とした。コロナ後の世界は、まだ、見通しが立たない。だが、過去に起きた、黒船から始まった、大きな変化とその結末は知ることができる。

参考文献

司馬遼太郎「坂の上の雲」文春文庫、1999
司馬遼太郎「世に棲む日」文春文庫、2003

あなたの実力はどこから？

看護学部 2年
小番 董



イラスト
デザイン学部2年
河内 茉佑

「あの子はテストの点数が高かった。だから成績が良いんだ。」至極当然なことのように感じますよね。当人の成果に応じて評価され報酬が与えられること、これを能力主義といいます。大学に合格したこと、恋人ができたこと、給料を貰うこと等々…全てのライフイベントが自身の培ってきたものの結果であり、故に当人はそれらの応酬に値するという考え方です。「雨だれ石を穿つ」「継続は力なり」という諺があるように、努力することは結果に繋がると言われています。これは言い換えると、結果はそれまでの行動に依拠すると捉えることができ、「因果応報」「身から出た錆」など悪行に関しても同様の諺があります。一見、何ら問題の無いように感じますが、こうした思想は「人の困難は全て自己責任によるもの」という解釈を生んでしまいます。勉強ができないこと、傷つくこと、何かを失うこと、これらは自己責任だと言い切ることはできるのでしょうか。日々の中で生じる苦しみや辛さは、その人の過去の行いが原因なのでしょう。

例えば、勉強の出来不出来は当人のみにより導き出された結果ではありません。大学受験を例にして考えると、合格のために必要な要素は受験勉強に向けた意志だけではなく、親の関心、教員ないし塾講師の存在、予備校、教材、集中できる環境、扶養による勉強時間の確保等、外的要因が多々あります。さらに言えば、集中力や才能、意志の強さも親や環境から与えられたものに他ならないでしょう。現在COVID-19の影響を受けていない人はいません。全員が同じ問題に直面したからこそ、社会的弱者を苦しめている現状が露呈し、学歴志向や実力重視の社会が、新たな偏見を生んだことがわかるようになりました。コロナ渦において、裕福であったリインターネットに精通したりしている人は、オンライン授業に備え高品質な電子機器や快適なネット接続環境を用意し、効率的に学習を進めることができます。これにより勉強に対する意欲が向上する人もいるでしょう。対して、経済的余裕が無かったリインターネットに疎かったりした場合はどうでしょうか。劣悪なネット環境で講義を受けることは困難であり、学習効果は薄まるのが予測されます。「成績が悪い」後者は本人の努力不足による結果でしょうか？

ここまで考えると、能力主義がいかに独善的で、才能や環境に恵まれた者の排他的な思想であるかがわかるのではないでしょ

うか。結果というものは、自らの力で掴み取ったものではなく、偶然あったものを使ってたまたま手に入ったと表現するほうが適切です。自らの成功を誇り、自信にすることは大切なことですが、その成功を実力だと思い込み傲慢な態度をとることは間違いです。

集団生活から切り離された、現状の個として置かれている自他の環境に思考を巡らせると、前提条件が既に不平等であるため、格差が増大し固定化されてしまうという未来が予測できます。劣悪な環境の中で努力をして障壁を乗り越えることはしばしば美談として語られますが、これは膨大な努力をしなければ乗り越えられない障壁があるという問題提起ではないでしょうか。努力を称え結果へと繋げることを美德とした能力主義社会は、社会的強者と弱者の分断を招き、リパタリアニズムにも通じるこの思想は社会的弱者への歩み寄りを疎かにし、新たな差別や偏見を生むこととなります。

著書の中で、サンデル教授は謙虚であることの重要性を説きました。そして、労働を尊敬し承認する必要がある、失われた社会の絆を修復しなければならないと述べています。現代社会では、集団としての帰属意識が薄まっているように感じます。個人と個人の間で容易に繋がることが可能になった代償として、関係性が解消されやすくなりました。個人が自由に縛られない社会とは、個人が孤立し居場所がなくなる可能性を大いに孕んでいる社会でもあります。事象の結果だけを追うのではなくその背景を含めて捉え直すことで、個人が生きやすい社会へと導くことができるのではないのでしょうか。

参考文献

マイケル・サンデル著、鬼澤忍訳「実力も運のうち 能力主義は正義か？」早川書房、2021

ビビッドカラーに惹かれて

デザイン学部 2年
水井 さくら



イラスト
デザイン学部2年
菊地 哲平

ここ数年で買った本といえば、参考書、ファッション誌、少女漫画、写真集。活字を読むなら電子書籍と図書館で十分。そんな私がこの夏、小説を買った。ふらりと立ち寄った書店の陳列棚に、目を引く鮮やかなオレンジ色のカバーを見つけた。ざらざらとした手触りの上質な紙に、緑の箔押しでタイトルと著者名が記されている。吉本ばななの「キッチン」。角度を変えるとキラキラと輝く。見慣れないカバーはどうやら新潮文庫のキャンペーンのようだ。ふむ、なかなかカワイイではないか。かねてから地下鉄やバスの移動中に美しいカバーのかかった文庫本を読むことに密かに憧れていた。外見だけで本を選ぶのは情けない気もするが、こんな選び方もナシではないだろう。吉本ばななの作品は中学生の頃一度だけ短編を読んだことがある。「キッチン」も有名な作品だからきっと面白いだろう。そう思いパラパラと本をめくっていると、衝撃的な文字が目飛び込んできた。「ムーンライト・シャドウ」。まさに中学2年生の夏に読んだ短編だった。

教室の窓際一番後ろの棚には、担任の先生が持ち込んだ本が並べられていた。ざっと40冊ほどはあっただろうか。年季の入った薄茶色の本たちに、ほとんどの人が興味を持たなかった。ところが一人だけ、その本棚と真剣に向き合う少年がいた。授業中はいつも眠そうで、放課後になると走って部活に向かう彼は、友達が多く昼休みにも毎日サッカーだのバスケットボールだのに誘われていた。しかし彼はその誘いを全て断り、本を読んでいた。窓際の一番後ろの席でひとり夢中になる姿は普段とはまるで別人のようで、何がそんなに彼を魅了するのか、私には不思議でたまらなかった。ちょうどその頃、夏休みの国語の課題で読書感想文を提出することになったので、私はその本棚から一冊選ぶことにした。有名なファンタジー小説や学者のエッセイ、自己啓発本、百人一首の解説など、様々な本の中で目に留まったのが、「ムーンライト・シャドウ」だった。月光の影なんて素敵だし、作者の吉本ばななって名前もなんだかカワイイ。直感で選んだ本は、読んでみると恋人の死と向き合う少女の葛藤の物語であった。暗いテーマだが、会話はテンポ良く進んでいく。幼かった私には愛や恋は少し遠い世界のように感じたが、それでも大切な人を突然失った彼女の気持ちは痛いほど伝わってきた。恋に落ちるきっかけはほんの些細なこと。死ぬほど愛する人を失った行き場のない怒

り。悲しみを誤魔化す息苦しさ。張り詰めたような早朝の冷たい空気。この人といると何か変わるかもしれないという、偶然の出会い。ページを進めるごとに世界観に入り込み、読み終わった時は、すごく短い時間にも感じたし、一人の人生の密度の高い部分をぎゅっと詰め込んだ、とても長い時間を経験したようにも感じた。なるほど、彼はこれに魅了されているのかもしれない。夏休みが明け、読書感想文の発表会を終えた後の昼休み、彼は私が本棚に戻した「ムーンライト・シャドウ」を読んでいた。恋に落ちるきっかけは、ほんの些細なことである。

今となっては彼の名前も顔もイマイチ思い出せないし、今どこで何をしているかは全くわからない。しかし作品のタイトルを見た瞬間、その世界に引き込まれた記憶が鮮明に呼び起こされた。このように書いてみるとなんだかよくある話のような気もするが、たまたま行った書店でたまたま目に留まった小説が、たまたま思い出深い作品だった、というのは普段本を買わない私からしてみればかなり運命的な出会いであった。手に取ったビビッドカラーの文庫本は、今日も日常を鮮やかに彩ってくれている。

参考文献

吉本ばなな「キッチン」新潮社、2002
桑園 文庫・新書 913.6/Yos

音から自分を捉える

デザイン研究科 1年
清水 康志



イラスト
デザイン学部2年
菊地 哲平

私の人生の分岐点はどこにあるだろうか。まだ短いこの人生の分岐点の中から一番大きな点を上げるとすると学部での研究だろうと思う。しかし、その始まりは全くもって良いものとは言えないものだった。数個の希望する研究室とともに希望する研究テーマの概要を提出するのだが、予定の管理をなによりも苦手としていた当時の私は提出期限を動違ひしていた。焦りながら間に合せのテーマを提出し、数文字の研究概要を元に第2希望の研究室に配属されることになった。

私の大学にはプレゼミという配属前にゼミ活動を体験できる制度があり、私はその制度を利用して体験済みだった研究室を第2希望としていた。そもそもなぜその研究室をプレゼミとして選んだか、それは単にその先生と話してみたかったからである。その程度の心持ちで研究室に配属されたことで、テーマ選びには四苦八苦した。先生からは「私が決めたテーマでもいいんですよ」と言われたが、当時の私は「これは煽りか」と捉え反抗心を芽生えさせていた。そうするほうが楽だと思っていたが、「ここで折れては自分の研究ではなくなる、自分で考えなければ」と考え拒んでいた。しかし、どんなものが好きで研究になり得るのか、アタリをつけることができなかった。いくら自分の心に問いかけても、「なんか良さそう」「研究になりそうな気がなんとなくする」のような曖昧な返答しかない。そんな中、少しの音楽経験をどうにか活かそうと「音」に絞ろうと考えた。そして、思いついたテーマをよくお世話になっていた先生に話してみた。論破された。考えたテーマもどんな話をされたかもよく覚えていないが、「サウンド・エデュケーション」という本を紹介されたことだけは覚えている。

「サウンド・エデュケーション」は、サウンドスケープ（聴取者が聴取しうる音を指す概念）の提唱者によって書かれた音の聴き方を育成する課題集である。そのまえがきには、この世の音環境は荒れてきている、その改善は人々の音の聴き方を学ぶことで達成されるなど、志高い文章が勇ましく書かれている。初めて読んだとき、目からウロコが落ち、世界を変えるすごい概念に出会ったと少し嬉しくなった。今もそう思っているかは別の話であるが、音を聴くことに楽しさや意味はあると思っている。

「サウンド・エデュケーション」や、それに関連した研究で提案

されている課題をいくつかやってみたことがある。1度や2度だったこともあり特に効果を実感することはなかったが、音を「聴く」という体験はとても良かった。少し周りの音に集中するだけで、今まで全く意識していなかった音が体を包む感覚を鮮烈に覚えている。今まで主な感覚であった視覚では到底掴むことができない些細な変化や遥かに遠い場所の情報を聴覚である程度鮮明に感受できることが衝撃的であった。

そこで聴いた音の中でも取り立てて印象に残る音がいくつかあった。カラスの鳴き声、アスファルトを踏む足音、ディーゼル車のエンジン音など取り留めのない音たちであるが、私にはなにか懐かしさを感じさせる音たちだった。それらの音の印象はどこからくるのか気になり探ってみた。コンピュータを用いて印象に合う他の音を重ねて聴くことで、そのサウンドスケープを再現することを試みたのである。その結果それらの音は私の幼少期の何気ない風景の構成要素であることがわかった。私が実家にいたとき夕方になると聞こえてくるカラスの声や、家の前に停まる親の車のエンジン音はよく聞いていた覚えはある。しかし、特筆するほど好きな印象もなければ、集中して聴いた覚えもない。にもかかわらず懐かしさを感じさせるこの音たちはなんだろうか。それは世間に多くは触れず染まり切っていない時の自分の身に染み付いた、音における自分の原点とも言えるのではないかと。少なくとも現在の音の聴き方に影響を与えているのではないかと思う。

私の学部の研究はすでに終わっている。音を聴くことで音の捉え方が変わる、そういった結論であったが、ひいては自分を捉え直すヒントになるのではないかとと思う。

参考文献

R・マリー・シェーファー著、鳥越けい子、若尾裕、今田匡彦訳「サウンド・エデュケーション」春秋社、1992
芸術の森 2F 一般図書 760.7/SAU



燃えよ剣

芸術の森キャンパス・ライブラリー司書
岡井 ヨリザ

この物語は、江戸時代末期に活躍した新選組の副長の土方歳三が、上洛する前から函館戦争で亡くなるまでの10年程度が描かれたものです。4半世紀以上前に、日本史を受験科目にしていた私は、司馬遼太郎に興味を持ち始め、「竜馬が行く」から「新選組血風録」を経て「燃えよ剣」にたどり着きました。

いずれも面白い作品なのでお勧めですが、この物語は何度読み返しても印象が変わること無く面白く読めると感じたために選びました。

他にも10代から何度か読み直している小説は数冊ありますが、以前は正義と感じていた物に違和感を覚えたり、共感を抱く人物が変わってくることを感じる時があります。年を重ねる毎に思い描く物に変化があるのは読書の醍醐味ではありますが、この物語の印象が変わらないのに魅力的なのは何故なのか考えてみました。

あとがきの前に「奇妙さ」という筆者が土方歳三の取材を進めている時に感じた事を綴った短文が収録されています。この文の最後に、土方歳三は政治に全く興味が無いまま組織づくりに情熱を燃やしたことに感じた奇妙さから、この人物を書いていこうと決心し

たということが書かれています。これを読んだときに、政治的正義は変動するかもしれないけれど、人物そのものは不変であり、その不変の魅力のみ捉えた物語だからこいつまでも変わらないのではと思いました。

幕末という政治的正義が混沌とした時代の中で、主人公の土方歳三の行動はピエロのようだと評する人もいて、政治的な思考とはかけ離れていたのだらうと思われます。その主人公の奇妙な情熱をブレること無く捉え表現したこの作品は、いつまでも変わらずに魅力的であるものだと信じています。

※「新撰組」と「新選組」の2通りの表記がありますが、この物語では「新選組」となっているのでそちらに合わせました。

参考文献

司馬遼太郎「燃えよ剣；奇妙さ」新潮社、1979

芸術の森 2F 文学全集 918.6/SHI

司馬遼太郎「燃えよ剣」新潮社、1972

芸術の森 1F 文庫新書 913.6/Shi/上・913.6/Shi/下

京都・社寺参拝入門(らくたび文庫)

桑園キャンパス・ライブラリー司書
戸間替 美紅

みなさん旅は好きですか？私は京都旅行が大好きで、何度も訪れています。お参りついでに変わった御朱印を集めたり、美味しい和菓子や抹茶スイーツを食べ歩いたり、物の怪や怨霊・呪いの言い伝えが残る地を訪ねる魔界巡りをしてみたい…。残念ながら今はまだ遠出がしにくい状況なので、京都のガイドブックを眺めて、次は何をしようか未来に思いを馳せています。みなさんも次の旅がもっと楽しいものとなるよう、勉強の合間にお気に入りのガイドブックを探してみたいかがでしょうか。

「らくたび文庫」は京都の魅力がテーマ別にまとめられており、そのうち「京都・社寺参拝入門」からお気に入りの章をご紹介します。

「神社を護る動物たち」(P.28～)では、神社にいる動物たちを紹介しています。例えば三宅八幡宮には、神の使いとして狛犬ならぬ“狛鳩”がいます。以前、車窓から見た八幡宮の看板が気に入り、途中下車してふらりとお参りしました。その際に「鳩を描いてみました…。」と、どこか自信がなさそうな神職のおじさん手描きの小さい鳩(?)がいる御朱印を頂いて、ほっこりしたことは懐かしい思い出です。御朱印の他にも動物をモチーフにしたおみくじやお守りがある神社も多いので、あちこち探してみるのもいいですね。

また「門前名物」(P.68～)では、参拝ついでについ買いたくなってしまう名物を、おいしそうな写真や由来と共に紹介しています。なかでも私が好きなのは、下鴨神社近く「加茂みたらし茶屋」の名物「みたらし団子」です。神社境内のみたらし池に湧き出る泡を象ったものとも、1串に5個の団子が人の形を表しているともいわれています。たれが甘さ控えめで香ばしく、境内を散策した後に頂くと、より美味しく感じられます。さらに、ちょっと変わったものをお土産に選ぶなら、冥界への入口があるといわれている六道珍皇寺の近く「みなとや幽霊子育館本舗」の「幽霊子育館」がおすすめ。身籠ったまま亡くなった女性の幽霊が、夜な夜な胎を買いに来て赤ん坊を育てていたという言い伝えから名付けられました。赤地に白で大きく書かれた「幽霊子育館」の少しおどろおどろしい包みに反して、麦芽糖のどこか懐かしい味わいが、渡した相手にインパクトを与えること間違いなしです。

参考文献

「京都・社寺参拝入門(らくたび文庫No.007)」コトコト、2007

桑園 文庫・新書 291.62/Rak/7 他、同シリーズ8冊所蔵

図書貸出ランキング

芸術の森

AV視聴ランキング

No.1 弔る建築：終の空間としての火葬場
日本建築学会編、鹿島出版会、2009
芸術の森 2F 一般図書 526.38/Nih

No.2 別れの場に相応しい空間の創造
(建築設計資料：109. 葬斎場・納骨堂：2)
建築資料研究社、2007 芸術の森 2F 一般図書 525.1/Ken/109

No.3 建築スケッチ・パース：基本の「き」(エクスナレッジムック)
山田雅夫著、エクスナレッジ、2013 芸術の森 2F 一般図書 525.18/Yam

No.4 世界の美しい公園
パイインターナショナル編著、パイインターナショナル、2018
芸術の森 2F 一般図書 629.3/Plie

No.5 中学英語は7日間でやり直せる。：マンガでカンタン！
澤井康佑著・関谷由香理漫画、学研プラス、2018
芸術の森 2F 一般図書 830/5aw

No.6 むらさきのスカートの女
今村夏子著、朝日新聞出版、2019 芸術の森 2F 一般図書 913.6/Ima

総評

今回は同じ貸出回数の図書が多く、同率1位として記載いたしました。また、1位の6冊のうち3冊も建築関係の図書がランキングに入るといった結果になりました。新型コロナウイルスの影響で全体の貸出回数は減少し、特に文学の貸出回数は減少しました。しかし、建築、商業デザイン(CM/ポスターなどのデザイン)、芸術・アニメ・イラストレーションなど、講義や研究に関する分野の図書は今回も人気で、貸出回数が多くなっています。
(芸術の森キャンパス・ライブラリー：山田)

図書貸出ランキング

桑園

AV視聴ランキング

No.1 看護研究のための文献レビュー：マトリックス方式
ジュディス・ガラード著、安部陽子訳、医学書院、2012 桑園一般図書 492.907/Gar

No.2 根拠がわかる母性看護過程：事例で学ぶウェルネス志向型ケア計画
中村幸代編、南江堂、2018 桑園一般図書 492.924/Nak

No.3 ヘンダーソン、ロイ、オレム、ペプロウの看護論と看護過程の展開
金子通子編著、照林社、1999 桑園一般図書 492.9/Kan

No.4 オレムのセルフケア・モデル(看護モデルを使う：1)
ステューブ J.カパナ著、数間恵子、雄谷智恵美訳、医学書院、1993 桑園一般図書 492.9/Kan/1

No.5 ウェルネスからみた母性看護過程+病態関連図 第3版
佐世正勝、石村由利子編、医学書院、2016 桑園一般図書 492.924/Sas

総評

2020年から流行している新型コロナの影響で前期期間の登校禁止に加え、館内利用が制限される状況が続き、図書館の利用について改めて見つめ直す1年となりました。そこで新たに郵送貸出サービスを開始しましたが、貸出数は前年の約3割と大幅に減少しました。ランキングを見ると看護研究に関する図書が上位にランクインしており、毎年上位の「病気がみえる」シリーズなどはランク外となりました。図書館では引き続き郵送貸出サービス、電子書籍の利用が可能です。また教員選定・後援会図書も追加されています。新着図書はOPACから確認できますので是非ご利用ください。
(桑園キャンパス・ライブラリー：佐藤)

No.1 ブラックパンサー
ライアン・クワグラー監督、ウォルト・ディズニー・ジャパン
芸術の森 1F AV 778/Bla

No.2 Green Book
directed by Peter Farrelly, GAGA, GAGA (distributor)
芸術の森 1F AV 778/Gre

No.3 ファースト・マン
デミアン・チャゼル監督・制作、スティーブ・スピルバーグ製作総指揮、NBCユニバーサル・エンターテイメント(発売) 芸術の森 1F AV 778/Fir

No.4 インクレディブル・ファミリー
written & directed by Brad Bird, produced by John Walker, executive producer John Lasseter, Walt Disney Studios(発売) 芸術の森 1F AV 778.77/Ink

No.5 リメンバー・ミー
directed by Lee Unkrich, co-directed by Adrian Molina, produced by Darla K. Anderson, executive producer John Lasseter, screenplay by Adrian Molina, Matthew Aldrich 芸術の森 1F AV 778.77/Rem

No.6 ボヘミアンラプソディ
ブライアン・シンガー監督、グレアム・キング、ジム・ビーチ製作、アンソニー・マクカーテン脚本、20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン(発売) 芸術の森 1F AV 778/Boh

No.7 Spider-man: into the spider-verse
directed by Bob Persichetti, Peter Ramsey, Rodney Rothman/Sony Pictures Entertainment 20世紀フォックス・ホーム・エンターテイメント・ジャパン(発売) 芸術の森 1F AV778/Sp

総評

洋画「ブラックパンサー」が1位に選ばれました。ここ数年、AV視聴ランキングは洋画が人気傾向にありますが、今回も例に漏れずその人気が続いているようです。反対に毎年人気があったアニメーション映画は、全体的に貸出回数が減少してしまいました。当館では館内視聴限定のアニメーション映画を多く所蔵しているため、新型コロナウイルスの影響で館内視聴ができない状況が続いてしまったことが原因の一つかと思われます。
(芸術の森キャンパスライブラリー：結城)

図書貸出ランキング

No.1 喘息発作で入院した小児の看護事例
(看護教育シリーズ、小児看護のためのアセスメント事例集：vol.1)
小川純子原案、医学映像教育センター、2014 桑園 AV 492.925/Sho/1

No.2 川崎病で入院した小児の看護事例
(看護教育シリーズ、小児看護のためのアセスメント事例集：vol.5)
伊藤奈津子原案、医学映像教育センター、2017 桑園 AV 492.925/Sho/5

No.3 膀胱尿管逆流で手術を受けた小児の看護事例
(看護教育シリーズ、小児看護のためのアセスメント事例集：vol.6)
伊藤奈津子原案、医学映像教育センター、2018 桑園 AV 492.925/Sho/6

No.4 発達障害の理解と支援：わかり合おうって、素敵だね！
日本発達障害福祉連盟企画、アローウィン製作・著作、アローウィン、2008 桑園 AV 378/Hat

No.5 3歳児・4歳児・5歳児(健康・保健シリーズ、乳幼児の発達と保育：vol.3)
[医学映像教育センター制作著作]、医学映像教育センター、2011 桑園 AV 376.1/Nyu/3

No.6 運動機能の発達(健康・保健シリーズ、子どもの発達と支援：vol.1)
医学映像教育センター(発売)、2005 桑園 AV 493.91/Kod/1

総評

毎年ランクインしている「看護教育シリーズ」から、今回は「小児看護のためのアセスメント事例集」が上位を独占しました。貸出全体をみても、小児看護のDVDがほとんどを占め、次いで母性看護、精神看護と続いており、実習時期にあわせた教員の利用が多く見受けられます。また、2020年度はコロナウイルス感染防止対策として、AVブースの利用を制限していたため、例年に比べ貸出回数が全体的に少なくなっています。
(桑園キャンパス・ライブラリー：作本)